二〇一六年五月二七日

潮入に群れてふぐの子躍如たり　豆　狸
黒書院白書院へと廊涼し　菜々
獅子口を焦がさんばかり薪能　さつき
街騒を隔つ城内松涼し　ひかり
新茶来る一筆箋に元気かと　満　天
尺取の宙測りをる葉先かな　よし女
驚愕や五寸の百足お風呂場に　明日香

二〇一六年五月二六日

就活のスーツの徒らに若葉萌ゆ　あさこ
玄関の三和土涼しと犬眠る　ぽんこ
はまなすや沖に巨船と漁り舟　よう子
古城址を埋め尽くしたる草いきれ　豆　狸
笛の音が闇を切り裂く薪能　さつき
耳鳴りにあらず今のは時鳥　よし女
洞窟の涼し柱状摂理また　こすもす
雨の路地右に左に四葩愛づ　ひかり
センセーションてふ薔薇殊によく香る　なおこ
時鳥雨が来るぞと叫びけり　うつぎ
薬指小指を立てて枇杷を剥く　ともえ
薫風裡おしゃべり尽きぬカフェテラス　さつき

二〇一六年五月二五日

岬鼻の海に向く墓地夏つばめ　なつき
ゆくりなく子鹿と出会ふ山路かな　あさこ
欄に寄れば鯉くる橋涼し　ひかり
江ノ電はいまし若葉の切通し　智恵子
下闇に水軍一等兵の墓　さつき
能面の影魑魅のごと薪能　なつき
新緑の園に真つ赤な滑り台　さつき
明易しだあれもいない無人駅　豆　狸
山藤の屑こぼす道逍遥す　あさこ
自転車で駈ける新樹の並木道　なおこ
警官の表敬並び更衣　うつぎ
あめんぼう青天井の水面駈く　豆　狸
陽光を弾きて眩し樟若葉　宏　虎
アンネ像囲みて薔薇の薫りけり　こすもす

二〇一六年五月二四日

夏雲を貫きて消ゆ飛行雲　豆　狸

お隣の声筒抜けや路地薄暑　さつき
夏草に埋もれて露座の風化仏　よし女
赤と黄と園二タ分けすチューリップ　あさこ
対岸は茅花流しの銀の波　豆狸
熱中症かもしれぬこのだるさかな　明日香
薫風に安産祈願の旗なびく　さつき
老鶯のしばなく山路吟行す　あさこ

二〇一六年五月二三日

結界と見たる竹垣木下闇　まゆ
読経めく左右の蛙田通夜帰り　こすもす
余花にあふ山湖の径を分け入れば　ひかり
古民家のひと梁ごとに燕の巣　智恵子
愛犬が吾を導く若葉道　豆狸
雀の子ホームにたたら踏みにけり　さつき
薔薇園はビルの谷間の笑窪かな　菜々
感謝多謝夫の手作り豆ごはん　明日香
せせらぎの楽が涼しきカフェテラス　満天
ハミングもとびだす若葉風の径　泰山
山里の過疎の盆地に鯉幟　さつき

二〇一六年五月二一日

金婚の妻に感謝し新茶汲む　宏虎
狼煙めく煙ひとすじ麦の秋　三刀
軍服の父しか知らず杜若　たか子
釣人の波止にひしめく五月晴　智恵子
重さうに首うなだるる雨の薔薇　まゆ
門入るや否やに百花ばら香る　菜々

白壁にゴースト躍る薪能　なつき
手植えとは思えぬ植田美しき　たか子
軒先に自慢の薔薇や理髪店　まゆ
弓を引く古希の媼や立葵　治男
嬰児の大きな欠伸聖五月　宏虎

毎日句会みのる選・二〇一六年五月二九日